

四方300°の範囲から歌詞に歌いこまれ、調査対象の中では最も広い角度である。茨城県内だけでなく、千葉県の銚子市、千葉市に及ぶとともに、千葉県北部から栃木県の芳賀・下都賀両郡にかけての中学校の校歌になっている。東京都・埼玉県を調査対象に加えれば、さらに広範囲になるであろう。

紫句う筑波山に結びつく徳目は、「理想」「そのきびし

さに、たくまじき意志つちかい」「筑波は遠く希望呼ぶ」「不屈の筑波」「ゆるぎなく」「礼節」「あこがれ」「正義の誓い」「進取の意気」などであるが、「理想」と「希望」を筑波山に求める校歌が多い。

万葉集の古歌をはじめ多くの詩歌に詠まれ、鎌倉時代以後信仰登山の山は、今も校歌の中に生きている。

(筑波大学)

北斗七星象徴の七天王塚

山田 安彦

千葉市街地南東部の猪鼻台地上に、北斗七星を象徴化した小円墳形式の地物が七基存在する。この台地は通称「猪鼻台」で、四方から複雑な開析谷が入り込み、甚しく変形したX字形の平面形態を呈する標高22~23mの台地地形を形成する。周囲の谷津田とは大体15~6mから20m前後の比高をなし、西辺は断崖をもって接す。まさしく過去においては天険要害の地であった。東方から西流する都川はこの台地の北東から北周にかけて流れ、西方で東京湾に注ぐ。この地点は東京湾奥北東部の水陸の結節点に当り、しかも安房・上総の両国府から北上する道路と、下総国府から東行する道路が結合して常陸方面に向う要衝の地である。このように立地環境と地形環境により、交通上、軍事上、政治上、かつまた洪水防禦上、猪鼻台は立地上有利点を有する。したがって当時の在地豪族がその場を見逃す筈がない。

『千学集抄』によれば、千葉常重は大治元年(1126)に上総国大椎から猪鼻に居城を移した。築城とともに居館集落の道路網を整備し、千葉一門の屋敷、侍屋敷、町人屋敷、市場町、職人屋敷などを配置したのである。なおそのみではなく、千葉氏猪鼻居館集落の守護神として、艮の方位に曾場鷹大明神(現貝塚町下内)に勧請し、鬼門を守護することにした。その対蹠的位置の裏鬼門、すなわち坤の方位に御達報稻荷大明神(現稻荷町五田保)を、西方の結城に神明社(現神明町)を、南の千葉寺には龍蔵権現を勧請している。それらは今も現存する。なお現地形を詳細に観察すると、猪鼻台先端から北へ約1kmにわたり伸展する標高5~7m弱の微高地がある。これは旧砂嘴であろう。この北端に香取神社が、さらにその北部に妙見神社が鎮座している。それらの少し西寄り、猪鼻からはやや乾の方向に当る位置に、妙見尊を奉祀する北斗山金剛授寺を建立した。この北に伸びた微高地に建設された道路が千葉氏猪鼻居館集落の基軸のよう

に推察される。何故なら、この道路両側に千葉一門家臣の邸宅を配置しているからである。なお同史料によると、堀内(城郭内)には牛頭天王を奉祀している。これは猪鼻城からみれば巽の方位に当る。何故に、この方向に七基の牛頭天王を勧請した場を設けたのかは詳らかではない。これについてさらに『千学伝考記』によると、常重は大治2年6月に妙見尊を大椎城から猪鼻城内に勧請し祭祀を挙行している。しかし、妙見社は現存しない。ところが、猪鼻台にある千葉大学医学部正門内側に聖地とされているところがあり、そこが妙見社の元社地ではないかと推察されている。史料によると、城郭内に牛頭天王を奉祀しているように、現存の七天王塚の各塚にも牛頭天王を奉祀した小祠が安置され、その題銘には「堀内牛頭天王」と銘記されており、安永2年(1773)の建立である。これは明らかに『千学集』を参照して後世に建立したものであるが、7基の塚に関する伝承は多い。7基の地物と妙見社元社地、それに加えて千葉氏の守護神信仰が妙見菩薩であることから、7基塚が妙見信仰に基づくものであらうと筆者は推論する。しかし、それらの塚を線で結ぶと北斗七星の星座にはならない。ところが、猪鼻北方や乾の方位に香取神社と妙見神社、それに北斗山金剛授寺を建立していることなどを合考すると、やはり7基の塚の配置は妙見信仰に基づく北斗七星の象徴であり、堀内妙見社元社地が北極星の象徴ではないかと推論する。

なおもう一つ注意したい位置関係がある。それは左に説述する寺院との関係である。堀内妙見社元社地と七天王塚の延長上から少し外れる位置にあるが、星字久喜に星久山千手院があり、さらにその延長上の大宮台地上に坂尾山栄福寺がある。両者は同宗であり、後者が前者の宗寺であるが、記録によると、栄福寺は後世に改称された。創建当初は千葉常将(猪鼻城築城の常重の3代前の

千葉介)の家臣坂尾五郎治が、千葉氏の守護神である妙見尊を奉祀する北斗山金剛授寺を建立し、ここに館も建造した。この館が後に猪鼻城の重要な防備基地となった。同称同文同宗の寺院が猪鼻城の巽と乾の方位に建立されたことはその関係は浅くない。対蹠的方位に当り、前者は辰巳方位信仰の、後者は戌亥方位信仰の対象に当る。

城郭内外の四方八方に諸々の神仏を勧請し、祭祀場を建立したことは、城郭のみならず、居館集落、延ては領域の鎮護安泰と平穏息災を祈願するためのものである。また宇宙・自然の摂理条理に沿って地上面の施設を齋整化し象徴化することによって、人間はその象徴を媒介として宇宙や自然、神に接近するものと信じたし、さらに

それによって招福を念願したと考える。

なお想像を拡大するならば、守護神の配置が象徴化されたのみならず、城郭の移転配置についても北辰信仰を象徴化したのではないかと考えられる。すなわち、大椎城、栄福寺館、千手院、七天玉塚、堀内妙見社、猪鼻城、北斗山金剛授寺、院内香取神社並びに妙見神社の配置構想は広域的にみて北辰の象徴であろうと想像される場合もあるのではなからうか。

要するに、古においては形而上的地域的体系というものも考慮していたように思われる。

(千葉大学)

野外調査法断想

齋藤光格

西ドイツのフンボルト留学生は、ふつう留学の終りに、フンボルト財団主催で見学旅行をすることになっている。ところが私の場合、シュラー教授のお勧めで、到着早々にこの旅行に参加することになった。そのあとポフムに帰ると、早速何を観察したかという御質問である。「中世都市の広場と市庁舎が印象的でした。」と答えたところ、それをテーマに研究することになってしまった。

日本では、他の分野の目覚ましい成果に圧倒され、西ドイツでは理論や技術を勉強したい、などと漠然と考えていたので、これは予期しないことであった。その後ルール大学地理学教室の行う野外巡検に何度か参加し、その方法についていくつか参考になる示唆を得ることができた。その2、3をここに紹介しよう。

まず、自分の見聞したことを大切にするように、とくにどこにでもあって一見平凡な現象からテーマを見つけるように、ということである。ある地域で一般に見られることが、外国や異なる文化圏では特異であることが多く、そこに地理学の研究の鍵がある、とのことであった。

つぎに調査の方法であるが、西ドイツの地理学者は、野外で実に頻りに写真を撮り、マッピングを行う。もともと巡検で得たテーマであれば、マッピングは比較的容易である。ルール大学の地理学者が、日本で行った短期の調査を例にとってみよう。滋賀県の古い宿場町草津で、伝統と進歩というテーマで共同見学をしたことがある。商店街を調査する際、まず端から端まで歩き、たちまち指標を決めた。まず建築様式である。日本式か西洋式か、

表と裏は同じ様式か、材料は何か、などである。つぎは商品で、同じお茶でも緑茶か紅茶か、飲食店でも和食か洋食かその他か、衣服でも和服か洋服か、といった区別である。これを大縮尺の地図にマッピングすれば、文化圏研究の地図とデータがでる。あとで写真を撮る。この方法は、短期の調査には便利であろう。

もっとも、この方法は現状把握には向いているが、その特色の客観的説明となると容易ではない。私は西ドイツと日本の市街地のちがいで、家屋、街路、市街地全体のどこに重点を置くかが重要であると考えている。日本の家屋には、1つの単位として秩序があり、居心地もよく、背後に一定の哲学もある。しかしブロック塀や忍返して象徴されるように、外に対してはあまり好意的ではない。街路全体として、あるいは市街地全体としてみると、ばらばらであるとは一般の認めるところである。

西ドイツでは個々の家屋の造りは単純であるが、1つの建物が家族単位でないことが多く、鍵がないと中に入らず、部屋にも鍵がついている。しかし、外から庭を眺めやすく、窓辺の花も街路に向き、全体として街路と市街地に秩序がある。このちがいは、日本人の家族主義に対して、ヨーロッパ人の個人主義と地域共同体主義の表現ではないかと予想しているが、残念ながら、まだ科学的な説明の方法を見出せないでいる。

野外調査の方法はなお未完成で、若い人々の開拓の余地は大きいであろう。

(神戸大学)